

JFFID 日本代表 2024 アルゼンチン遠征 [国際親善強化マッチ]

報告者：日本代表監督 西 真一

1 日時・場所

期 間：2024 年 12 月 14 日（土）～24 日（火）

場 所：アルゼンチン／マル・デル・プラタ

2 遠征の目的

・2026 年 Virtus サッカー世界選手権に向けた強化（内容と勝利）



3 スタッフ・選手

スタッフ		選 手	
監督	西 真一	FP	福原 碧人（鹿児島）
コーチ	泉谷 光紀	FP	武田 稜久（大阪）
コーチ/アナリスト	竹中 康雄	FP	大野 航（兵庫）
GK コーチ	岡田 裕樹	FP	下鶴 掛夢（鹿児島）
アスレチックトレーナー	澤野 啓祐	FP	原 勇人（東京）
主務	古蘭 功詞郎	FP	佐藤 快（東京）
選 手		FP	犬塚 陸（愛知）
GK	荻野 泰幸（千葉）	FP	梅村 俊佑（神奈川）
FP	草田 佑介（広島）	FP	大久保 史弥（栃木）
FP	結城 隆（東京）	FP	小川 駿（東京）
FP	吉川 圭祐（東京）	FP	小才 天太（鹿児島）
FP	横井 知明（東京）		

スタッフ：6名 選手：16名 【※通訳兼コーディネーター 加藤 広明（T-LIFEパートナーズ）】

4 スケジュール

期日	午前	午後	夜
12月14日(土)			集合/日本出国
12月15日(日)	—移動—	—移動—	—移動—
12月16日(月)	到着 トレーニング	トレーニング	コンディション管理
12月17日(火)	トレーニング	親善強化マッチ① vs アルゼンチン	コンディション管理
12月18日(水)	リカバリー トレーニング	調整マッチ vs ルメンコ	コンディション管理
12月19日(木)	トレーニング	トレーニング	ミーティング
12月20日(金)	強化マッチ② vs アルゼンチン	コンディション管理	コンディション管理
12月21日(土)	トレーニング(シュート)	オフザピッチプログラム	ミーティング
12月22日(日)	—移動—	オフザピッチプログラム	アルゼンチン出国
12月23日(月)	—移動—	—移動—	—移動—
12月24日(火)	—移動—	—移動—	日本入国/解散

5 試合結果

◆親善強化マッチ① 日本 1 $\begin{pmatrix} 1-0 \\ 0-2 \end{pmatrix}$ 2 アルゼンチン

◆得点者：犬塚

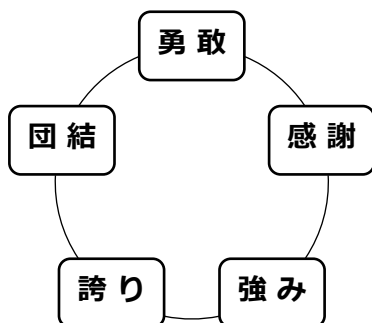
※詳細は、別紙マッチレポート①を参照。

◆親善強化マッチ② 日本 2 $\begin{pmatrix} 0-1 \\ 2-2 \end{pmatrix}$ 3 アルゼンチン

◆得点者：結城、梅村

※詳細は、別紙マッチレポート②を参照。

6 JFFID 日本代表 IDENTITY



日本代表、それは夢の舞台で躍動する集団
日本人である誇りと個々の強みを持ち
日本の勝利のために覚悟し、それを団結する
すべての関わりに感謝し、勇敢に世界に挑む。

7 総括

昨年に引き続き 2026 年 Virtus サッカー世界選手権に向けた強化として 2 回目のアルゼンチン遠征を実施しました。日本のほぼ真裏にある同国は、季節は夏、時差が-12 時間で、日本からアルゼンチン（ブエノスアイレス）まで飛行機で 34 時間、試合の行われるマル・デル・プラタの町までバスで 6 時間、日本から現地への総移動時間が 40 時間と、今回も長い移動を伴う環境下での活動となりました。

現地到着（早朝 4 時）後、少しの休息をとり、早速ピッチで軽い TR を行いました。午後は、アルゼンチンチーム 5 人の選手と一緒に合同 TR を行いました。

滞在 2 日目、午後からアルゼンチン代表と親善強化マッチを行いました。前半は、日本がアルゼンチンを終始圧倒し、何度もゴール決定機があるなかで犬塚のゴールにより 1-0 で折り返しました。後半立ち上がりも日本ペースでしたが、ゴール決定機を逃すと徐々にアルゼンチンに押し込まれる時間が増え、試合終了間際の PK を含む 2 失点で敗戦しました。

滞在 3 日目、午前は、前日試合のフル出場選手はリカバリー、そのほかの選手は TR を行いました。午後は、地元健常者チームとの調整マッチを行い、スピードとプレーの質が高い相手に対し、日本はミスやセットプレーで前半に 4 失点しました。後半は、システムを変更し、前日試合時間の少なかった選手が 2 得点をあげる活躍により 2-0、ゲーム内で課題の修正ができたこと、アルゼンチンとの 2 戦目に向けてシステム変更の可否と選手起用の確認ができたことは成果でした。

滞在 4 日目、トレーニングと休息。

滞在 5 日目、強風下でのアルゼンチンとの 2 戦目でした。立ち上がりは互角の戦いで、アルゼンチン FW にボールは入るものの最終ラインの結城、草田、吉川の落ち着いた対応、ボランチの横井、武田のプレスバックによるボール奪取が機能しアルゼンチン FW を自由にさせませんでした。良い守備から良い攻撃へのテンポもよく、1 トップの犬塚、トップ下の下鶴、大久保の突破力とコンビネーションによる崩し、また、佐藤、大野のサイドからの崩しで何度もアルゼンチンゴールを脅かしました。DF 背後への浮き球の対応が悪く 2 失点しましたが、セットプレー、交代選手の活躍とシステム変更により 2 得点するなど、粘り強い戦いができていました。1 戦目同様終了間際のアルゼンチンの猛攻に粘り強く対応している中で、PK 判定による失点で敗戦となり、90 分を通して得点機を多

く逸したこと（決定力不足）は課題として次に繋げたいと思います。また、国際試合で初めてスタメンに起用された GK 荻野は、落ち着いて試合に入り、ミスは少なからずあるものの正確なキャッチングやセービングによりチームに大きく貢献しました。最終ラインとの連携、プレスキックは、日常における試合実戦とトレーニングの積み重ねにより自信をつけて欲しいです。途中出場で通算 3 ゴール（調整マッチ含）得点した梅村は、ゴールに向かう姿勢を自分の武器としてさらなる成長を期待します。福原・原・小川・小才は今遠征での経験を踏まえ、さらに自分の強みを磨き成長することを望みます。

今遠征でのトピックとして、日本からお米を 40kg 現地に持ち込み、毎食時に食しました。また、アルゼンチンチーム選手スタッフと同じ宿舎、合同トレーニングにより交流が図られました。最終日のオフザピッチプログラムでは、アルゼンチンのサッカー文化に触れることができました。

前回も述べましたが、「世界を日常に。」を掲げる日本代表チームは、海外遠征を重ねるごとに、逞しさ、海外選手相手に怯まないメンタルとパフォーマンス発揮の積み重ねができています。そして世界トップクラスの国と直接対戦し体感できる「世界トップのプレー強度」は、日本代表のプレーに根付いています。

その成果として、国際試合において、攻撃、守備において落ち着いてプレーし、選手一人一人の持つ力を発揮できています。また、ゲーム中のフォーメーション変更への対応力、試合で求められるプレーの理解と実行する力など、選手のレベルは格段にアップしています。このことは、選手の日常におけるサッカー活動に日々ご尽力くださっている地域技術委員、指導者、支援者の皆様のおかげです。今後、日本が世界トップに立つために、「世界トップのプレー強度」のある日常が、日本全体で広がることが不可欠です。そのために、まずは各地域でのリーグ戦等において勝負に拘りを持ち、拮抗したゲームの実現、そのためにさらなるプレー（判断を伴い発揮するテクニック・個人戦術・グループ戦術）の質向上が必要です。引き続きお願いいたします。

最後に、選手を送り出していただいたチーム、学校、企業、及び選手を日頃からサポートしてくださっている皆様方におかれましては、代表チームの活動にご理解とご協力をしていただき誠にありがとうございました。2026 年の Virtus サッカー世界選手権で過去最高の成績をあげられるよう、さらなる強化を進めてまいります。

引き続きよろしくお願いたします。ありがとうございました。



